七宝の柱

泉鏡花

山吹(やまぶき)つつじが盛(さかり)だのに、その日の寒さは、俥(くるま)の上で幾度も外套の袖(そで)をひしひしと引合(ひきあわ)せた。
夏草(なつくさ)やつわものどもが、という芭蕉(ばしょう)の碑が古塚(ふるづか)の上に立って、そのうしろに藤原氏(ふじわらし)三代栄華の時、竜頭(りゅうず)の船を泛(うか)べ、管絃(かんげん)の袖を飜(ひるがえ)し、みめよき女たちが紅(くれない)の袴(はかま)で渡った、朱欄干(しゅらんかん)、瑪瑙(めのう)の橋のなごりだと言う、蒼々(あおあお)と淀んだ水の中に、馬の首ばかり浮いたような、青黒く朽古(くちふる)びた杭(くい)が唯(ただ)一つ、太く頭を出して、そのまわりに何の魚(うお)の影もなしに、幽(かすか)な波が寂(さび)しく巻く。
――雲に薄暗い大池がある。
池がある、この毛越寺(もうえつじ)へ詣でた時も、本堂わきの事

務所と言った処に、小机を囲んで、僧とは見えない、鼠だの、茶だの、無地の袴はいた、閑らしいのが三人控えたのを見ると、その中に火鉢はないか、赫と火の気の立つ……とそう思って差覗いたほどであった。

旅のあわれを、お察しあれ。……五月の中旬と言うのに、いや、どうも寒かった。

あとで聞くと、東京でも袷一枚ではふるえるほどだったと言う。

汽車中、伊達の大木戸あたりは、真夜中のどしゃ降で、この様子では、思立った光堂の見物がどうなるだろうと、心細いまできづかわれた。

濃い靄(もや)が、重(かさな)り重り、汽車と諸(もろ)ともに駈(かけ)りながら、その百鬼夜行(ひゃくきやこう)の、ふわふわと明けゆく空に、消際(きえぎわ)らしい顔で、硝子(がらす)窓を覗(のぞ)いて、

「もう！」

と笑って、一つ一つ、山、森、岩の形を顕(あら)わす頃から、音もせず、霧雨になって、遠近(おちこち)に、まばらな田舎家(いなかや)の軒とともに煙りつつ、仙台に着いた時分に雨はあがった。

次第に、麦も、田も色には出たが、菜種(なたね)の花も雨にたたかれ、畠(はたけ)に、畝(あぜ)に、ひょろひょろと乱れて、女郎花(おみなえし)の露を思わせるばかり。初夏はおろか、春の

闌(たけなわ)な景色とさえ思われない。

ああ、雲が切れた、明(あかる)いと思う処(ところ)は、

「沼だ、ああ、大(おおき)な沼だ。」

と見る。……雨水が渺々(びょうびょう)として田を浸(ひた)すので、行く行く山の陰は陰惨として暗い。……処々(ところどころ)巌(いわ)蒼く、ぽっと薄紅(うすあか)く草が染まる。嬉(うれ)しや日が当ると思えば、角(つの)ぐむ蘆(あし)に交(まじ)り、生茂(おいしげ)る根笹(ねざさ)を分けて、さびしく石楠花(しゃくなげ)が咲くのであった。

奥の道は、いよいよ深きにつけて、空は弥(いや)が上に曇った。けれども、志(こころざ)す平泉(ひらいずみ)に着いた時は、幸いに雨はなかった。

そのかわり、俥（くるま）に寒い風が添ったのである。
――さて、毛越寺では、運慶（うんけい）の作と称（とな）うる仁王尊（におうそん）をはじめ、数ある国宝を巡覧せしめる。
「御参詣の方にな、お触（さわ）らせ申しはいたさんのじゃが、御信心かに見受けますするで、差支えませぬ。手に取って御覧なさい、さ、さ。」
と腰袴（こしばかま）で、細いしない竹の鞭（むち）を手にした案内者の老人が、硝子蓋（がらすぶた）を開けて、半ば繰開（くりひら）いてある、玉軸金泥（ぎょくじくこんでい）の経（きょう）を一巻、手渡しして見せてくれた。
その紺地（こんじ）に、清く、さらさらと装上（もりあが）った、一行金字（いちぎょうきんじ）、一行銀書（いちぎょうぎんしょ）の経である。

俗に銀線に触るるなどと言うのは、こうした心持かも知れない。尊い文字は、掌に一字ずつ幽に響いた。私は一拝した。

「清衡朝臣の奉供、一切経のうちであります——時価で申しますとな、唯この一巻でも一万円以上であります。」

橘 南谿の東遊記に、

これは清衡 存生の時、自在坊蓮光といへる僧に命じ、一切経書写の事を 司らしむ。三千日が間、能書の僧数百人を 招請し、供養し、これを書写せしめしとなり。余もこの経を拝見せしに、その書

体楷法(かいほう)正しく、　行法(ぎょうほう)また精妙にして――
と言うもの　即(すなわち)　これである。
ちょっと（この寺のではない）　或(ある)案内者に申すべき事がある。　君が提(ささ)げて持った鞭だ。　が、　遠くの掛軸(かけじく)を指し、　高い　処(ところ)の仏体を示すのは、　とにかく、　目前に近々(ちかぢか)と拝まるる、　観音勢至(かんおんせいし)の金像(きんぞう)を説明すると言って、御目(おんめ)、　眉の前へ、　今にも触れそうに、　ビシャビシャと竹の尖(さき)を振うのは勿体(もったい)ない。　大慈大悲の仏たちである。大して御立腹もあるまいけれども、　作(さく)がいいだけに、瞬(またたき)　もしたまいそうで、　さぞお鬱陶(うっとう)しかろうと思う。
俥(くるま)　は寂然(しん)とした夏草塚(なつくさづか)の傍(そば)に、　小さく見えて待っ

ていた。まだ葉ばかりの菖蒲(あやめ)杜若(かきつばた)が隈々(くまぐま)に自然と伸びて、荒れたこの広い境内(けいだい)は、宛然(さながら)沼の乾いたのに似ていた。

別に門らしいものもない。

此処(ここ)から中尊寺(ちゅうそんじ)へ行く道は、参詣の順をよくするために、新たに開いた道だそうで、傾いた茅(かや)の屋根にも、路傍(みちばた)の地蔵尊(じぞうそん)にも、一々(いちいち)由緒のあるのを、車夫(わかいしゅ)に聞きながら、金鶏山(きんけいざん)の頂(いただき)、柳の館(たち)あとを左右に見つつ、俥(くるま)は三代の豪奢(ごうしゃ)の亡びたる、草の径(こみち)を静(しずか)に進む。

山吹がいまを壮(さかり)に咲いていた。丈高(たけたか)く伸びたのは、車の上から、花にも葉にも手が届く。——何処(どこ)か邸(やしき)

の垣根越(ごし)に、それも偶(たま)に見るばかりで、我ら東京に住むものは、通りがかりにこの金衣(きんい)の娘々(じょうじょう)を見る事は珍しいと言っても可(よ)い。田舎の他土地(ほかとち)とても、人家の庭、背戸(せど)なら格別、さあ、手折(たお)ってもいいよ、とこう野中(のなか)の、しかも路の傍(はた)に、自由に咲いたのは殆ど見た事がない。

そこへ、つつじの赤いのが、ぽーとなって咲交(さきまじ)る。

……

が、燃立(もえた)つようなのは一株も見えぬ。霜(しも)に、雪に、長く鎖(とざ)された上に、風の荒ぶる野に開く所為(せい)であろう、花弁が皆堅い。山吹は黄なる貝を刻んだようで、つつ

じの薄紅（うすくれない）は珊瑚（さんご）に似ていた。

音のない水が、細く、その葉の下、草の中を流れている。それが、潺々（せんせん）として巌（いわ）に咽（むせ）んで泣く谿河（たにがわ）よりも寂（さみ）しかった。

実際、この道では、自分たちのほか、人らしいものの影も見なかったのである。

そのかわり、牛が三頭、犢（こうし）を一頭（ひとつ）連れて、雌雄（めすおす）の、どれもずずんと大（おおき）く真黒なのが、前途（ゆくて）の細道を巴形（ともえがた）に塞（ふさ）いで、悠々と遊んでいた、渦が巻くようである。

これにはたじろいだ。

「牛飼（うしかい）も何もいない。野放しだが大丈夫かい。……

彼奴《あいつ》猛獣だからね。」

「何ともしゃあしましねえ。こちとら馴染《なじみ》だで。」

けれども、胸が細くなった。轅棒《かじ》で、あの大《おおき》い巻斑《まきふ》のある角《つの》を分けたのであるから。

「やあ、汝《われ》、……小僧も達《たっ》しゃがな。あい、御免。」

敢《あえ》て獣《けもの》の臭《におい》さえもしないで、縦の目で優しく視《み》ると、両方へ黒いハート形の面《おもて》を分けた。が牝牛《めうし》[#「牝牛」では底本では「牡牛」]の如きは、何だか極りでも悪かったように、さらさらと雨のあとの露を散《ちら》して、山吹の中へ角を隠す。

私はそれでも足を縮めた。

「ああ、漸(やっ)と衣(ころも)の関(せき)を通ったよ。」

全く、ほっとしたくらいである。振向いて見る勇気もなかった。

小家(こいえ)がちょっと両側に続いて、うんどん、お煮染(にしめ)、御酒(おんさけ)などの店もあった。が、何処(どこ)へも休まないで、車夫(わかいしゅ)は坂の下で俥(くるま)をおろした。

軒端(のきば)に草の茂った、その裡(なか)に、古道具をごつごつと積んだ、暗い中に、赤絵(あかえ)の茶碗、皿の交(まじ)った形は、大木の空洞(うつろ)に茨(いばら)の実の溢(こぼ)れたような風情(ふぜい)のある、小さな店を指して、

「あの裏に、旦那、弁慶(べんけい)手植(てうえ)の松があるで——御覧に

なるかな。」

「いや、帰途(かえり)にしましょう。」

その手植の松より、直接(じか)に弁慶にお目に掛(かか)った。

樹立(こだち)の森々(しんしん)として、聊(いささ)かもの凄(すご)いほどな坂道——岩膚(いわはだ)を踏むようで、泥濘(ぬかり)はしないがつるつると辷(すべ)る。雨降りの中では草鞋(わらじ)か靴ででもないと上下(じょうげ)は難(むずか)しかろう——其処(そこ)を通抜(とおりぬ)けて、北上川(きたかみがわ)、衣河(ころもがわ)、名にしおう、高館(たかだち)の址(あと)を望む、三方見晴しの処(ここに四阿(あずまや)が立って、椅子の類、木の株などが三つばかり備えてある。)其処(そこ)へ出ると、真先に案内するのが弁慶堂である。

車夫(わかいしゅ)が、笠を脱いで手に提(さ)げながら、裏道を崖下(がけさが)り

に駈出（かけだ）して行った。が、待つと、間もなく肩に置手拭（おきてぬぐい）をした円髷（まるまげ）の女が、堂の中から、扉を開いた。

「運慶の作でございます。」

と、ちょんと坐ってて言う。誰でも構わん。この六尺等身と称（とな）うる木像はよく出来ている。山車（だし）や、芝居で見るのとは訳（わけ）が違う。

顔の色が蒼白い。大きな折烏帽子（おりえぼし）が、妙に小さく見えるほど、頭も顔も大の悪僧の、鼻が扁（ひらた）く、口が、例の喰（くい）しばった可恐（おそろ）しい、への字形でなく、唇を下から上へ、への字を反対に掬（しゃく）って、

「むふッ。」

ニタリと、しかし、こう、何か苦笑をしていそうで、目も細く、目皺が優しい。出額でまたこう、しゃくうように人を視た工合が、これで魂が入ると、麓の茶店へ下りて行って、少女の肩を大な手で、

「どうだ。」

と遣りそうな、串戯ものの好々爺の風がある。が、歯が抜けたらしく、豊な肉の頬のあたりにげっそりと窶の見えるのが、判官に生命を捧げた、苦労のほどが偲ばれて、何となく涙ぐまるる。

で、本文通り、黒革縅の大鎧、樹蔭に沈んだ色ながら鎧の袖は颯爽として、長刀を軽くついて、少し屈

みかかった広い胸に、兵（えもの）の柄（え）のしなうような、智と勇とが満ちて見える。かつ柄も長くない、頬先（ほおさき）に内側にむけた刃も細い。が、かえって無比の精鋭を思わせて、颯（さっ）と掉（ふ）ると、従って冷い風が吹きそうである。

別に、仏菩薩（ぶつぼさつ）の、尊（とうと）い古像が架（か）に据えて数々ある。

みどり児（ご）を、片袖（かたそで）で胸に抱（いだ）いて、御顔（おんかお）を少し仰向（あおむ）けに、吉祥果（きっしょうか）の枝を肩に振掛（ふりか）け、裳（もすそ）をひらりと、片足を軽く挙げて、――いいぐさは拙（つたな）いが、舞（まい）などしたまう状（さま）に、たとえば踊りながらでんでん太鼓で、児（こ）をおあやしのような、鬼子母神（きしぼじん）の像があった。御面（おんおもて）は天女に斉（ひと）しい。彩色（いろどり）はない。八寸ばかりのほのぐらい、が

活けるが如き木彫(きぼり)である。

「戸を開けて拝んでは悪いんでしょうか。」

置手拭(おきてぬぐい)のが、

「はあ、其処(そこ)は開けません事になっております。けれども戸棚でございますから。」

「少々ばかり、御免下さい。」

と、網の目の細い戸を、一、二寸開けたと思うと、がっちりと支(つか)えたのは、亀井六郎(かめいろくろう)が所持と札を打った笈(おい)であった。

三十三枚の櫛(くし)、唐(とう)の鏡、五尺のかつら、紅(くれない)の袴(はかま)、重(かさね)の衣(きぬ)も納(おさ)めつと聞く。……よし、それはこの笈に

てはあらずとも。
「ああ、これは、疵(きず)をつけてはなりません。」
棚が狭いので支(つか)えたのである。
そのまま、鬼子母神を礼して、ソッと戸を閉(た)てた。
連(つれ)の家内が、
「粋(いき)な御像(おすがた)ですわね。」
と、ともに拝んで言った。
「失礼な事を、――時に、御案内料は。」
「へい、五銭。」
「では――あとはどうぞお賽銭(さいせん)に。」
そこで、鎧(よろい)着(き)たたのもしい山法師に別れて出た。

山道、二町ばかり、中尊寺はもう近い。

大(おおき)な広い本堂に、一体見上げるような釈尊(しゃくそん)のほか、寂寞(せきばく)として何もない。それが荘厳であった。日の光が幽(かすか)に漏(も)れた。

裏門の方へ出ようとする傍(かたわら)に、寺の廚(くりや)があって、其処(そこ)で巡覧券を出すのを、車夫(わかいしゅ)が取次いでくれる。巡覧すべきは、はじめ薬師堂(やくしどう)、次の宝物庫(ほうもつこ)、さて金色堂(こんじきどう)、いわゆる光堂(ひかりどう)。続いて経蔵(きょうぞう)、弁財天(べんざいてん)と言う順序である。

皆、参詣の人を待って、はじめて扉を開く、すぐまたあとを鎖(とざ)すのである。が、宝物庫(ほうもつぐら)には番人がいて、

経蔵には、年紀の少い出家が、火の気もなしに一人経机に対っていた。

はじめ、薬師堂に詣でて、それから宝物庫を一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手にして、一条、道を隔てた丘の上に導く。……階の前に、八重桜が枝も撓に咲きつつ、かつ芝生に散って敷いたようであった。

桜は中尊寺の門内にも咲いていた。麓から上ろうとする坂の下の取着の処にも一本見事なのがあって、山中心得の条々を記した禁札と一所に、たしか「浅葱桜」という札が建っていた。けれども、それのみ

には限らない。処々（ところどころ）汽車の窓から視（み）た桜は、奥が暗くなるに従って、ぱっと冴（さえ）を見せて咲いたのはなかった。薄墨（うすずみ）、鬱金（うこん）、またその浅葱（あさぎ）と言ったような、どの桜も、皆ぽっとりとして曇って、暗い紫を帯びていた。雲が黒かったためかも知れない。

　唯（と）、階（きざはし）の前の花片（はなびら）が、折からの冷い風に、はらはらと誘（さそ）われて、さっと散って、この光堂の中を、空（そら）ざまに、ひらりと紫に舞うかと思うと――羽目（はめ）に浮彫（うきぼり）した、孔雀（くじゃく）の尾に玉を刻んで、緑青（ろくしょう）に錆（さ）びたのがなお厳（おごそか）に美しい、その翼を――ぱらぱらとたたいて、ちらちらと床にこぼれかかる……と宙で、黄金（きん）の巻柱（まきばしら）

の光をうけて、ぱっと金色(こんじき)に飜(ひるがえ)るのを見た時は、思わず驚歎の瞳(ひとみ)を瞠(みは)った。

床も、承塵(なげし)も、柱は固(もと)より、彳(たたず)めるものの踏む処(ところ)は、黒漆(こくしつ)の落ちた黄金(きん)である。黄金(きん)の剝(は)げた黒漆とは思われないで、しかも些(さ)のけばけばしい感じが起らぬ。さながら、金粉の薄雲の中に立った趣(おもむき)がある。われら仙骨(せんこつ)を持たない身も、この雲はかつ踏んでも破れぬ。その雲を透(すか)して、四方に、七宝荘厳(しっぽうそうごん)の巻柱(まきばしら)に対するのである。美しき虹を、そのまま柱にして絵(えが)かれたる、十二光仏(じゅうにこうぶつ)の微妙なる種々相(しゅじゅそう)は、一つ一つ錦(にしき)の糸に白露(しらつゆ)を鏤(ちりば)めた如く、玲瓏(れいろう)として珠玉(しゅぎょく)の中にあらわれ

て、清く明(あきら)かに、しかも幽(かすか)なる幻である。その、十二光仏の周囲には、玉、螺鈿(らでん)を、星の流るるが如く輝かして、宝相華(ほうそうげ)、勝曼華(しょうまんげ)が透間(すきま)もなく咲きめぐっている。

この柱が、須弥壇(しゅみだん)の四隅(しぐう)にある、まことに天上の柱である。須弥壇は四座(しざ)あって、壇上には弥陀(みだ)、観音(かんおん)、勢至(せいし)の三尊(さんぞん)、二天(にてん)、六地蔵(ろくじぞう)が安置され、壇の中は、真中に清衡(きよひら)、左に基衡(もとひら)、右に秀衡(ひでひら)の棺(かん)が納まり、ここに、各一口(ひとふり)の剣(つるぎ)を抱(いだ)き、鎮守府将軍(ちんじゅふしょうぐん)の印(いん)を帯び、錦袍(きんぽう)に包まれた、三つの屍(しかばね)がまだそのままに横(よこた)わっているそうである。

雛芥子(ひなげし)の紅(くれない)は、美人の屍より開いたと聞く。光堂は、ここに三個の英雄が結んだ金色(こんじき)の果(このみ)なのである。

謹(つつし)んで、辞して、天界一叢(てんかいいっそう)の雲を下りた。

階(きざはし)を下りざまに、見返ると、外囲(そとがこい)の天井裏に蜘蛛(くも)の巣がかかって、風に軽く吹かれながら、きらきらと輝くのを、不思議なる塵(ちり)よ、と見れば、一粒(いちりゅう)の金粉の落ちて輝くのであった。

さて経蔵(きょうぞう)を見よ。また弥(いや)が上に可懐(なつかし)い。羽目(はめ)には、天女——迦陵頻伽(かりょうびんが)が髣髴(ほうふつ)として舞いつつ、かなでつつ浮出(うきで)ている。影をうけた束(つか)、貫(ぬき)の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿(らでん)である。

漆塗(うるしぬり)、金の八角(はちかく)の台座には、本尊、文珠師利(もんじゅしり)、朱の獅子に騎(き)しておわします。獅子の眼(まなこ)は爛々(らんらん)として、赫(かっ)と真赤な口を開けた、青い毛の部厚な横顔が視(み)られるが、ずずッと足を挙げそうな構えである。右にこの轡(くつわ)を取って、ちょっと振向いて、菩薩(ぼさつ)にものを言いそうなのが優闐玉(ゆうてんぎょく)、左に一匣(いっこう)を捧げたのは善哉童子(ぜんざいどうじ)。この両側左右の背後に、浄名居士(じょうみょうこじ)と、仏陀波利(ぶっだはり)が一(ひとつ)は払子(ほっす)を振り、一(ひとつ)は錫杖(しゃくじょう)に一軸(いちじく)を結んだのを肩にかつぐように杖(つ)いて立つ。額(ひたい)も、目も、眉も、そのいずれも莞爾莞爾(にこにこ)として、文珠(もんじゅ)も微笑(ほほえ)んでまします。第一獅子が笑う、獅子が。

この須弥壇を左に、一架を高く設けて、ここに、紺紙金泥の一巻を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で、本経の図解を描く。……清麗巧緻にしてかつ神秘である。

いま此処に来てこの経を視るに、毛越寺の彼はあたかも砂金を捧ぐるが如く、これは月光を仰ぐようであった。

架の裏に、色の青白い、痩せた墨染の若い出家が一人いたのである。

私の一礼に答えて、

「ご緩り、ご覧なさい。」

二、三の散佚はあろうが、言うまでもなく、堂の内壁にめぐらした八の棚に満ちて、二代基衡のこの一切経、一代清衡の金銀泥一行まぜ書の一切経、並に判官贔屓の第一人者、三代秀衡老雄の奉納した、黄紙宋板の一切経が、みな黒燿の珠玉の如く漆の架に満ちている。――一切経の全部量は、七駄片馬と称うるのである。

「――拝見をいたしました。」

「はい。」

と腰衣の素足で立って、すっと、経堂を出て、朴歯の高足駄で、巻袖で、寒く細りと草を行く。清らかな

僧であった。

「弁天堂を案内しますで。」

と車夫(わかいしゅ)が言った。

向うを、墨染(すみぞめ)で一人行(ゆ)く若僧(にゃくそう)の姿が、寂(さび)しく、しかも何となく貴(とうと)く、正に、まさしく彼処(かしこ)におわする……天女の御前(おんまえ)へ、われらを導く、つつましく、謙譲なる、一個のお取次のように見えた。

かくてこそ法師たるものの効(かい)はあろう。

世に、緋、紫、金襴(きんらん)、緞子(どんす)を装(よそお)うて、伽藍(がらん)に処すること、高家諸侯(こうけだいみょう)の如く、あるいは仏菩薩(ぶつぼさつ)の玄関番として、衆俗(しゅうぞく)を、受附で威張(いば)って追払(おっぱら)うようなのが少くな

い。
　そんなのは、僧侶なんど、われらと、仏神の中を妨ぐる、姑（しゅうと）だ、小姑（こじゅうと）だ、受附だ、三太夫だ、邪魔ものである。
　衆生（しゅじょう）は、きゃつばらを追払（おいはら）って、仏にも、祖師にも、天女にも、直接（じか）にお目にかかって話すがいい。
　時に、経堂を出た今は、真昼ながら、月光に酔（よ）［＃ルビの「よ」は底本ではは「え」］い、桂（かつら）の香（か）に巻かれた心地がして、乱れたままの道芝（みちしば）を行くのが、青く清明なる円（まる）い床を通るようであった。
　階（きざはし）の下に立って、仰ぐと、典雅温優（てんがおんゆう）なる弁財天（べんざいてん）の

金字(きんじ)に縁(ふち)して、牡丹花(ぼたんか)の額(がく)がかかる。……いかにや、年ふる雨露(あめつゆ)に、彩色(さいしき)のかすかになったのが、木地(きじ)の胡粉(ごふん)を、かえってゆかしく顕(あら)わして、萌黄(もえぎ)に群青(ぐんじょう)の影を添え、葉をかさねて、白緑碧藍(はくりょくへきらん)の花をいだく。さながら瑠璃(るり)の牡丹である。

ふと、高縁(たかえん)の雨落(あまおち)に、同じ花が二、三輪咲いているように見えた。

扉がギイ、キリキリと……僧の姿は、うらに隠れつつ、見えずに開く。

ぽかんと立ったのが極(きまり)が悪い。

ああ、もう彼処(あすこ)から透見(すきみ)をなすった。

とそう思うほど、真白（ましろ）き面影、天女の姿は、すぐ其処（そこ）に見えさせ給う。

私は恥じて俯向（うつむ）いた。

「そのままでお宜（よろ）しい。」

壇は、下駄（げた）のままでと彼（か）の僧が言うのである。

なかなか。

足袋（たび）の、そんなに汚れていないのが、まだしもであった。

蜀紅（しょくこう）の錦（にしき）と言う、天蓋（てんがい）も広くかかって、真黒（まくろ）き御髪（みぐし）の宝釵（ほうさい）の玉一つをも遮（さえぎ）らない、御面影（おんおもかげ）の妙（たえ）なること、御目（おんまな）ざしの美しさ、……申さんは恐多（おそれおお）い。ただ、

西の方遥(かたはるか)に、山城国(やましろのくに)、浄瑠璃寺(じょうるりでら)、吉祥天(きっしょうてん)のお写真に似させ給う。白理(はくり)、優婉(ゆうえん)、明麗(めいれい)なる、お十八、九ばかりの、略人(ほぼひと)だけの坐像である。
ト手をついて対したが、見上ぐる瞳に、御頬(おんほお)のあたり、幽(かすか)に、いまにも莞爾(かんじ)と遊ばしそうで、まざまざとは拝めない。

私は、端坐して、いにしえの、通夜(つや)と言う事の意味を確(たしか)に知った。

このままに二時(ふたとき)いたら、微妙な、御声(おこえ)が、あの、お口許(くちもと)の微笑(ほほえみ)から。――

さて壇を退(しりぞ)きざまに、僧のとざす扉につれて、かし

こくもおんなごりさえ惜(おし)まれまいらすようで、涙ぐましくまた額(がく)を仰いだ。御堂そのまま、私は碧瑠璃(へきるり)の牡丹花(ぼたんか)の裡(うち)に入って、また牡丹花の裡から出たようであった。

花の影が、大(おおき)な蝶(ちょう)のように草に映(さ)した。

月ある、明(あきらか)なる時、花の朧(おぼろ)なる夕(ゆうべ)、天女が、この縁側(えんがわ)に、ちょっと端居(はしい)の腰を掛けていたまうと、経蔵から、侍士(じし)、童子(どうじ)、払子(ほっす)、錫杖(しゃくじょう)を左右に、赤い獅子に騎(き)して、文珠師利(もんじゅしり)が、悠然と、草をのりながら、

「今晩は——姫君、いかが。」

などと、お話がありそうである。

と、麓（ふもと）の牛が白象（びゃくぞう）にかわって、普賢菩薩（ふげんぼさつ）が、あの山吹のあたりを御散歩。

まったく、一山（いっさん）の仏たち、大（おおき）な石地蔵（いしじぞう）も凄（すご）いように活きていらるる。

下向（げこう）の時、あらためて、見霽（みはらし）の四阿（あずまや）に立った。

伊勢、亀井（かめい）、片岡（かたおか）、鷲尾（わしのお）、四天王の松は、畑中（はたなか）、畝（あぜ）の四処（よところ）に、雲を鎧（よろ）い、繇糸（ゆるぎいと）の風を浴びつつ、或（ある）ものは粛々（しゅくしゅく）として衣河（ころもがわ）に枝を聳（そび）やかし、或（ある）ものは恋々（れんれん）として、高館（たかだち）に梢（こずえ）を伏せたのが、彫像の如くに視（なが）めらるる。

その高館（たかだち）の址（あと）をば静（しずか）にめぐって、北上川の水は、はるばる、瀬もなく、音もなく、雲の涯（はて）さえ見えず、た

だ（はるばる）と言うように流るるのである。

「この奥に義経公（よしつねこう）。」

車夫（くるまや）の言葉に、私は一度俥（くるま）を下りた。

帰途は——今度は高館を左に仰いで、津軽青森まで、遠く続くという、まばらに寂しい松並木の、旧街道を通ったのである。

松並木の心細さ。

途中で、都らしい女に逢ったら、私はもう一度車を飛下（とびお）りて、手も背（せな）もかしたであろう。——判官（ほうがん）にあこがるる、静（しずか）の霊を、幻に感じた。

「あれは、鮭（さけ）かい。」

すれ違って一人、潑刺（はつらつ）［＃「刺」は底本では「刺」］たる大魚（おおうお）を提（さ）げて駈通（かけとお）ったものがある。

「鱒（ます）だ、――北上川で取れるでがすよ。」

ああ、あの川を、はるばると――私は、はじめて一条（ひとすじ）長く細く水の糸を曳（ひ）いて、魚（うお）の背とともに動く状（さま）を目に宿したのである。

「あれは、はあ、駅長様の許（とこ）へ行（ゆ）くだかな。昨日（きのう）も一尾上（いっぴきあが）りました。その鱒は停車場（ていしゃば）前の小河屋（おがわや）で買ったでがすよ。」

「料理屋かね。」

「旅籠屋（はたごや）だ。新築でがしてな、まんずこの辺では彼店（あすこ）だね。まだ、旦那、昨日はその上に、はい鯉（こい）を一尾（いっぴき）買入れたでなあ。」

「其処（そこ）へ、つけておくれ、昼食（ちゅうじき）に……」

――この旅籠屋は深切（しんせつ）であった。

「鱒がありますね。」

と心得たもので、

「照焼（てりやき）にして下さい。それから酒は罎詰（びんづめ）のがあったらもらいたい、なりたけいいのを。」

束髪（そくはつ）に結（ゆ）った、丸ぽちゃなのが、

「はいはい。」

と柔順(すなお)だっけ。

小用(こよう)をたして帰ると、もの陰から、目を円(まる)くして、一大事そうに、

「あの、旦那様。」

「何だい。」

「照焼にせいという、お誂(あつらえ)ですがなあ。」

「ああ。」

「川鱒(かわます)は、塩をつけて焼いた方がおいしいで、そうしては不可(いけ)ないですかな。」

「ああ、結構だよ。」

やがて、膳に、その塩焼と、別に誂えた玉子焼、青

菜のひたし。椀がついて、蓋を取ると鯉汁である。ああ、昨日のだ。これはしかし、活きたのを料られると困ると思って、わざと註文はしなかったものである。

口を溢れそうに、なみなみと二合のお銚子。

いい心持の処へ、またお銚子が出た。

喜多八の懐中、これにきたなくもうしろを見せて、

「こいつは余計だっけ。」

「でも、あの、四合罎一本、よそから取って上げましたので、なあ。」

私は膝を拍って、感謝した。

「よし、よし、有難う。」

香（こう）のものがついて、御飯をわざわざ炊（た）いてくれた。

これで、勘定が――道中記には肝心な処だ――二円八十銭……二人（ににん）分です。

「帳場の、おかみさんに礼を言って下さい。」

やがて停車場（ステエション）へ出ながら視（み）ると、旅店（はたごや）の裏がすぐ水田（みずた）で、隣（となり）との地境（じざかい）、行抜（ゆきぬ）けの処に、花壇があって、牡丹が咲いた。竹の垣も結（ゆ）わないが、遊んでいた小児（こども）たちも、いたずらはしないと見える。

ほかにも、商屋（あきないや）に、茶店に、一軒ずつ、庭あり、背戸（せど）あれば牡丹がある。往来（ゆきき）の途中も、皆そうであった。かつ溝川（みぞがわ）にも、井戸端にも、傾いた軒、崩れた壁

の小家（こいえ）にさえ、大抵（たいてい）皆、菖蒲（あやめ）、杜若（かきつばた）を植えていた。弁財天の御心（みこころ）が、自（おのずか）ら土地にあらわれるのであろう。

忽（たちま）ち、風暗く、柳が靡（なび）いた。

停車場（ステエション）へ入った時は、皆待合室にいすくまったほどである。風は雪を散らしそうに寒くなった。一千年のいにしえの古戦場の威力である。天には雲と雲と戦った。

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店
　　１９８７（昭和62）年９月16日第１刷発行
　　　２００１（平成13）年２月５日第21刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十七巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年10月初版発行
初出：「人間」
　　１９２１（大正10）年７月号
入力：門田裕志
校正：米田進、鈴木厚司
２００３年３月31日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。